

特集 涙道疾患の最新情報**序 論**

雑賀司珠也*

今月号では、「涙道疾患の最新情報」ということで、涙道疾患と細菌感染の関係および、涙道の細菌感染を起点とするアレルギー反応を介した眼表面への影響を取りあげました。ご存じのように、急性あるいは慢性の感染性涙囊炎の所見を伴わない白内障手術を控えた症例で、涙道閉塞が発見されることがときにあります。臨床的に涙囊炎所見がみられなくても、結膜囊の細菌層は大きく変化していることが明らかとなっています。さらには、長期に抗菌点眼薬が処方されているような慢性の一進一退の感染性涙囊炎では、薬剤耐性菌の存在が背景にあるかもしれないと考えることができます。加えて、涙道閉塞に対する涙囊鼻腔吻合術後は、鼻腔と涙囊の腔の連続性が大きく増すことで、涙道細菌叢も影響されることが取りあげられています。

一方、多くの原著論文で、涙道の細菌感染では、内眼手術や緑内障手術での術後感染性眼内炎のリスクに注意を払う必要があることが提唱されています。術前の涙管通水試験の重要性を認識し、実施を怠らないように努めたいと思います（勤務する和歌山県立医科大学では、筆者の入局の昭和63年から欠かさず、継続されています）。

涙道疾患と細菌感染に対する非外科的対応（抗菌薬やポビドンヨード）も大きく誌面が割かれています。使用可能な抗菌点眼薬が増えるなか、今

一度、知識を整理したいと思っています。さらには、細菌感染を基礎としたアレルギー反応による角膜の上皮欠損・潰瘍性疾患も lacrimal drainage pathway disease-associated keratopathy (LDAK) として注目されています。ぜひ、この機会に情報をアップデートしていただけたら幸いです。

今回の特集では、常日頃遭遇する涙道閉塞に関連する疾患と細菌感染の関係、および涙道閉塞に対する治療後の症例の管理における細菌感染の位置づけに関する情報を一括してお届けできたのではないのでしょうか？と感じています。編集委員一同、ぜひ、ご一読をお勧めしたいと思います。

*Shizuya SAIKA 和歌山県立医科大学眼科学講座